０５・わたしは詩音ちゃんだけの淫魔

〈シチュエーション〉
本編トラック０４から約二時間後。
七月十日（水）九時すぎ。
主人公と詩音が通う「音海（おとうみ）学園」……からしばらく離れたところにある海岸。
主人公と詩音は、砂浜にレジャーシートを敷いて座り、詩音は主人公に膝枕されている。

ＳＥ１　海の環境音
【最初から最後まで流す】
【フェードインするように聞こえ始める】
【繰り返して流す】
【０―２０秒ほど流して『詩音』のセリフ】
【その後、音量が小さくなる】
【小さめの音量で流す】

【トラック終了まで流し続ける】

●【1】　下50センチ

■主人公と一緒にレジャーシートの上にいる。
さらに主人公に膝枕をされ、仰向けで空を見ている。
今日は素晴らしい天気で、確かに『こんな日は学校になんて行かずに、好きな人と海にでも行けたらどんなに素敵だろう』とは思う。
だが、それがどれだけ素敵で魅力的な事であろうと、気軽に実行していいかと言うと違う気がする。
であるにもかかわらず、詩音は今学校をさぼって主人公と海にいる。
『これ……いいのかな？　いや、ダメでしょう……。いいんちょは全く悪びれていないようだけど……。そろそろつっこみを入れないと……』という気分
「『ところで、そろそろこの状況についてお伺いしたいのですが……』という感じで」
……あのさぁ、いいんちょ」

〈主人公〉
「ん～？」

●【1】　下50センチ
「【根本的な疑問を口にする。
『こんなに思いっきり膝枕をしてもらっておいて、『そもそも』過ぎる質問で恐縮なのですが……』という感じで】
……あの。
何（なん）で海にいるの？　私達」

〈主人公〉
「バスを降りなかったから？」

●【1】　下50センチ
【『まぁ、確かにそうなんですけど……』という感じで。
主人公の悪びれなさに、内心ちょっと驚いて。
主人公という人間は、どうやら詩音の想像よりもずっと肝が据わっているというか、思い切りがよすぎる人物だったので】
……あ～……。
●※少し間をあけてから※　話す
うん。

●※少し間をあけてから※　話す
そう。
●※少し間をあけてから※　話す
『バスを降りなかったから』……だね」

〈主人公〉
「うん♪」

●【1】　下50センチ
「【あまりにも悪びれない主人公につっこみを入れる。
『いやいや、このまま主人公のペースに呑まれてはいけない』という感じで】
いや……そうなんだけど。
【心配そうに。質問の仕方が悪かったと考え、もっと直球でたずねる。
いつも通りダウナー気味ではあるが、本当は不安で不安でしょうがない】
学校サボっちゃってよかったの？
全然行く気だったでしょ？」

〈主人公〉

「まぁ、そうだけど……。
よかったの。
詩音ちゃん。人生にはね？
学校に行くよりも大事な事があるんだよ？」

●【1】　下50センチ
「【あまりにも悪びれない主人公につっこみを入れる。
同時に、ちょっと頭がくらくらして来る。
『ちょっとこの人、話が通じないのでは』という気がしてくる】
……いやいやいや。
いいんちょって呼ばれてた人のセリフじゃないよ、それ。
【『』部分をちょっとキリッと、少し芝居がかった感じで】
『人生には学校に行くより大事な事があるんだよ？』とかさぁ。
【ぼそっと、もごもごと。
恥ずかしそうに、本音を漏らす。
本当は、主人公が学校よりも自分と過ごす事を選んでくれた事が、申し訳なくも、とても嬉しいので。
また、体調面でも安心なので】

私は……委員長といられて嬉しいけど。
くっついてると、凄く安心だし……。
気持ち悪くもならなくて。
身体に何かあってもいいんちょが助けてくれると思うと、嬉しいけど……。
【だんだん声が小さくなってくる。
今の発言はあまりにも身勝手で、申し訳なさすぎるので】
何（なん）か、流石に頼りすぎっていうか。
申し訳ないっていうか……」

●※移動※
●【1】
●※近づきながら次のセリフ（『ん……？』）
【小さく驚いて。主人公の顔が近づいてきたので】
ん……？
【※1回※　軽くキスされる。
主人公からされて、受け身になる】
ちゅっ❤」

●※移動※
●【1】　下20センチ
●※唇が離れて、少し距離ができるイメージで※　話す
「【ちょっと呆れたように。
誤魔化すようにキスされたので】
あの……事の重大さ、わかってる？
【かわいく怒りつつ、でも、やっぱりちょっと嬉しさを隠しきれない感じで】
今、すっごい真面目な話してるんだよ？❤
私のせいで委員長が不良になっちゃうんじゃないかって、こっちは心配してるのに……！」

〈主人公〉
「わかってるよ～❤　だから、心配してくれて可愛いなぁって」

●【1】　下20センチ
「【ちょっとむすっとして。ちょっと呆れたように】
……む。
絶対わかってないでしょ……。

【ぼそっと複雑そうに。
『困ってるけど嬉しい……でも認めるのは癪……』という感じで。
『堂々とする』＝『堂々とキスする』】
……しかも、外でも堂々とするようになってきたし。
【かわいく怒って、小言を言う。
また、自分の能力の限界について述べる】
一応言っとくけどね。
あの魔法。ていうか技？　って、私が意識しないとできないんだよ？
……こんな風に不意打ちでされたら間に合わなくて。
全然、普通にキスしてるとこ見られちゃうよ？」

〈主人公〉
「いいよ、別に」

SE2　詩音が起き上がる音
【最初から最後まで流す】
【少し大きめの音量で流す】
【次の『詩音』のセリフと同時に流す】

ＳＥ３　詩音が起き上がる音２
【最初から最後まで流す】
【少し大きめの音量で流す】
【ＳＥ２が終わり次第、『詩音』のセリフと同時に流す】

●※移動※
●【９】
●※顔を見て話しやすくするために、起き上がって少し離れるイメージで※　話す
■起き上がって、正面に座って話し始める
「【戸惑って。ちょっと信じられないという感じで。
『嬉しいが、ちょっと都合がよすぎて困る』という感じで】
いいの……？」

〈主人公〉
「うん。
だって詩音ちゃんは、わたしの彼女だし」

●【9】
「【嬉しくて、言葉を詰まらせる。
正直な所、その言葉を言わせたくて今の会話をしていたまであるので】
……っ❤」

〈主人公〉
「わたしはそれを隠す気ないし、むしろ堂々と伝えて行きたいというか」

●【9】
■主人公に、これまでの己の所業を改めて言い聞かせる。
その上で『本当に自分と交際するつもりなのか』と尋ねる
「【甘えた感じでありつつも、ちょっと納得が行かない感じで。
詩音としてはすごく嬉しい。だが、あまりにも自分にとって都合が良すぎるので】
……何それ。
無理やり頼み込まれて最後までしちゃって。
その後も毎日ガンガン犯されてこんな事になってるのにさ。
【困惑して。
改めて言葉にすると、つくづく信じられない経緯で自分達は親密になっているので】

そんな、そういう始まり方だったのに……それなのに付き合う、とか。
ほんとにいいの？」

〈主人公〉
「うん。そのつもりっていうか、わたしはとっくにお付き合いしてる気でいたんだけど……」

●【9】
「【ますます困惑して。
本当はこのまま交際したいが、どうしても自分の良心が咎める。
また、これまでの行いのせいで、どうしても自分に自信が持てないので】
……大丈夫？　私はダメだと思う。
【消え入りそうな声で、申し訳なさそうに。
『どういう関係でもいい』は完全に嘘だが、到底選べる立場ではないので。
『どういう関係でもいい』＝『以前の提案の通り、セックスだけする友達でもいい』】
……私はほんとに、どういう関係でも、いいし。
【おろおろとたずねる。
本当はこのまま交際したいのに、どうしても申し訳なさと自信のなさから、このような

発言をしてしまう】
今からでも、もうちょっと考えた方が……」

〈主人公〉
「『いい』の！　考える必要なんてないよ。
わたしの気持ちは決まってるもん」

●【9】
「【嬉しくて、言葉を詰まらせる。
正直な所、その言葉を言わせたくて今の会話をしていたまであるので】
……っ……」

〈主人公〉
「確かに、始まりはちょっと予想外っていうか、ちょっと不思議な感じだったけど。
わたしは今とっても幸せだよ。
だって詩音ちゃん、可愛くて放っておけないんだもん」

●【9】

「【あまあまに。『ちょっと信じられない』という感じで。
今の主人公の発言が全体的に信じられないが、特にまさか『可愛くて放っておけない』と言われるとは思っていなかったので】
はぁ～？❤」

〈主人公〉
「わたしが今一番大事なのは、詩音ちゃん。
身体とか、心が思う通りにならない時も。
いつも一生懸命好きでいてくれて、わたしを信じて、いつも頼ってくれる詩音ちゃんの事が、わたしは大好き。
『あぁ可愛いなぁ、守ってあげたいなぁ』って思っちゃうの。
身体の事はとても心配だから、身体が落ち着くまではひとまず絶対そばにいようと思ってるし。
落ち着いた後だって、同じ。
いつも、こうしてそばにいるからね」

●【9】
「【困惑しつつも、すごく嬉しくて、たじたじになる】

もう……。
【甘えた感じでありつつも、ちょっと納得が行かない感じで。
やはり、詩音としてはすごく嬉しい。だが、あまりにも自分にとって都合が良すぎるので】
……そんなの、おかしいよ。
ほんとに都合、よすぎ。
私、めっちゃ甘やかされてる……」

〈主人公〉
「いいの、わたしがそうしたいんだから。
はい、という事で、これがわたしの気持ちだよ。
だからね、詩音ちゃんも本当の気持ちを教えて？
……本当に『一緒にいちゃダメ』なんて思ってる？」

●【9】
「【困惑しつつも、すごく嬉しくて、たじたじになる】
……う。
●※少し間をあけてから※　話す

【主人公の提案に従う。
元々の性格である気の弱さが出る】
わかった。委員長がちゃんと、気持ち教えてくれたから。
【『本当にいいのかな……』とためらいながらも、決意する】
私も本当の気持ちを……言う。
●※少し間をあけてから※　話す
【勇気を出して、本当の気持ちを打ち明ける。
恐る恐る、でもはっきりと。
一行ごとに、噛みしめるように、しっかり伝える】
……どんな関係でもいいなんて嘘。
本当は絶対離れたくない。一生付き合いたい。
いいんちょが好き。
【ちょっと声が小さくなる。
図々しい事は百も承知だが『自分の気持ちを伝える』となった以上は、これは外せない思いなので】
お嫁さんになって……ほしい……」

〈主人公〉

「でしょう？　わたしも同じ気持ちだよ。
これからもずっと、沢山いちゃいちゃしようね❤」

●【9】
「『困っているけど、嬉しい』という感じでため息をつく】
はぁぁ……。
【ぼそっと本音を漏らす】
何（なん）かほんとに……いいんちょの方がよっぽどサキュバスっぽい。
発想が人間じゃないよ」

〈主人公〉
「え？　そうかな？　どうしてそうなるの？」

●【9】
「【冷静にしつつも『もしかして、全くその自覚がないの？』という感じで】
……『どうしてそうなるの？』と来たか」

〈主人公〉

「急すぎるもん。話が見えないよ」

●【9】

「【冷静にしつつも『もしかして、全くその自覚がないの？』という感じで】

『話が見えないよ』とまでおっしゃる……。

【ちょっと呆れたように、言い聞かせるように。

自分の発言に補足していく。

先に進むにつれて、主人公への愛しさが滲んでいく感じで】

そうだよ……。

自覚ないならヤバいからちゃんと覚えといてね？

私からすれば、いいんちょの方が私よりよっぽど、人として心配な感じっていうか。

優しいし、人に尽くし過ぎるし。

『心配』とか『放っておけない』とか言ってるうちに流されてヤっちゃうし。

おまけに情が移っちゃって『彼女』とか呼んじゃうし。

【ぼそっと本音を漏らす。

本当はもう少しこの件について詳しく話したいところだが、ひとまずこれだけにとどめる】

……後、性欲が強すぎる。

こんな女の子、心配すぎるよ」

〈主人公〉
「う〜ん……？」

●【9】
「【主人公への想いを、改めて述べる。
主人公には心配な点が多々あるが、そんな彼女だからこそ自分は救われたし、今安心して暮らせる事を伝えたい。
『ガン刺さり』＝『たまらなく好き』
『身体がこんな事になって』＝『意図せぬサキュバス化に心身共に苦しめられて』】
……でも、そういうの。
……少なくとも、私にはガン刺さり。
私を受け止めてくれるのは、きっとこの世でいいんちょだけ。
急に身体がこんな事になって、ほんとは怖かったけど。
助けてくれたのがいいんちょだったから……私は今安心して暮らせてる。
凄く救われたし……私はそういういいんちょの事が大好き。
●※少し間をあけてから※　話す

……だから、ずっと私にだけ、そういう感じでいてね。
【『すっっ、ごい……』にちょっとだけ力を込めて】
私にだけそういう、すっっ、っごい……。
引くほどエロくて。
でも、優しくて。
いつもそばにいてくれる……そんな人で居て下さい。
いいんちょが私にしてくれた沢山の事……返せるか、今から不安だけど。
いつか必ず私を『選んでよかった』って思ってもらえるように、頑張るから……」

〈主人公〉
「……もう、とっくにそう思ってるよ？」

●※移動※
●【1】
「【※2回※　軽くキスされる。
主人公からされて、受け身になる】
ん……❤　ちゅ❤
【うっとりと、幸せそうに、でもちょっと不満ありげにため息をつく。

キスがあまりにも幸せで、でも『いいのかなぁ』と思う気持ちが完全に消えたわけではないので】

はぁ……。

【かわいく不満げにしつつも、まんざらでもなさそうに】

……好き。超好き。

私、一生こういう感じで負けてそう」

〈主人公〉

「ん？　どういう事？」

●【1】

「【かわいく拗ねた感じで。

自分の発言について補足する】

ん～？

『ずっといいんちょの事が好きで、ドキドキしてるんだろうなぁ』って事。

●※少し間をあけてから※　話す

【ちょっと悔しさはあるけれど、それを受け入れた感じで】

……まぁ、いっか。

●※少し間をあけてから※　話す
【照れ笑いして、受け入れた感じで】
きっと、そういう運命だったんだね。

【『初めて優しくしてもらった時』＝『園でのお泊まり会の一件』】
多分……初めて優しくしてもらった時から。
●※少し間をあけてから※　話す
もしそうなら……。
私、きっと誰より幸せすぎるね。
【穏やかに、でも深い愛情をこめて】
好きだよ。委員長。
【ちょっと申し訳なさそうにしつつも、嬉しそうに、幸せそうに】
じゃあ、もうちょっとだけここで……甘えさせてね」

ＳＥ４　詩音が寝転ぶ音
【最初から最後まで流す】
【ＳＥ４が終わった後、１５秒ほど待ってから次の『詩音』のセリフ】

●※移動※

●【1　下50センチ

■再び膝枕の体勢に戻って。しばらく無言で空を眺めて、ふと気づいたような感じで

「【ふと気づいたような感じで。
空を指さしながら話しているイメージで】
……あ。飛行機雲」

〈主人公〉
「えっ？　どこ？　教えて、詩音ちゃん」

●【1　下50センチ
「【優しく、穏やかに。幸せそうに。
『主人公とこんな景色を見られて、本当に幸せだ』という感じで】
ほら、あそこ……。
綺麗だね」

ここでフェードアウトして終了。